

都市と建築のブログ

～魅力的な都市や建築の紹介と
その3Dデジタルシティへの挑戦～

大阪大学大学院准教授
福田 知弘



Vol.7 ギリシャ・サントリーニ島:エーゲ海に舞い降りた白い集落

はじめに

福田知弘氏による「都市と建築のブログ」の好評連載の第7回。毎回、福田氏がユーモアを交えて紹介する都市や建築。今回はギリシャ・サントリーニ島の3Dデジタルシティ・モデリングにフォーラムエイトVRサポートグループのスタッフがチャレンジします。どうぞお楽しみください。

●エーゲ海にそそり立つ島

ギリシャの首都アテネから50分ほど飛行機に乗ると三日月形の島が見えてきた。サントリーニ島だ。青いエーゲ海からそそり立っている赤茶けた断崖絶壁と、その崖の頂きにある雪のような白いまちなみのコントラスト(図1)。60度近くの斜度をもつ断崖ができたのは、サントリーニが有史以来火山の噴火を繰り返してきたから。断崖の高さは海面から200~300m。そのため、クルーズ船が着くオールド・ポートと人々が暮らすフィラ(Fira)やイア(Oia)の町との行き来は、ゴンドラリフトを使うか、580段もの階段をロバで上り下りすることになる。



▲図1 イアより眺めるフィラの集落

このような荒々しい地形の島に人類が最初に足を踏み入れたのは、なんと紀元前3000年頃らしい。当時の人々は、サントリーニでどんな生活をし、どんなことを考えていたのだろうか、と、ついつい気になる。

●ヴォールト屋根のワケ

町は白一色。といっても、良く見ると屋根やドアにはカラフルな色も使われているのだが、石灰で塗られた白壁は、エーゲ海の強い日差しを避ける実用性も兼ね備える。建物は、断崖をくり抜いて作られた構造のため、室内の多くは洞窟であり天井はヴォールト(かまぼこ型)となっている。さらに、洞窟から前面に張り出して建物を構成する時、ヴォールトは屋根となる。このようにして、断崖にはヴォールトの屋根やファサードが幾重にも形成され、サントリーニの集落の特徴となっている(図2)。島の書店で見つけた、「LERNEN VON SANTORINI(Efthymios Warlamis著)」にはこの成り立ちを図解で詳述(図3)。そしてこのヴォールト天井を活かしたホテルや店舗がサントリーニのウリの一つ。



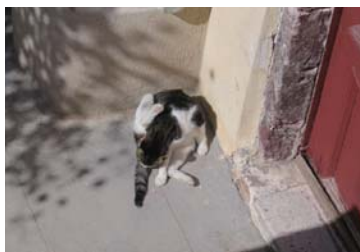
▲図2 ヴォールト屋根のまちなみ



▲図3 建物の成り立ち
(「LERNEN VON SANTORINI」より)

【プロフィール】1971年兵庫県加古川市生まれ。大阪大学大学院准教授、博士(工学)。環境設計情報学が専門。高松市4町パティオデザイン、近江八幡市のまちづくり、台湾Next Gene20など、国内外のプロジェクトに関わる。安藤忠雄建築展2009水都大阪1/300模型制作メンバー、NPO法人もうひとつの旅クラブ理事、大阪旅めがねエアクルー。「光都・こうべ」照明デザイン設計競技最優秀賞受賞。著書「VRプレゼンテーションと新しい街づくり」。ふくだぶろーぐは、<http://y-f-lab.jp/fukudablog/>

他のウリといえば、サントリーニに住む猫たち(図4)やウェディング(図5)。そして日の入り。海は主要な町から西方向に広がっているので、夕日が白い町を赤く染めていくのだ。



▲図4 サントリーニ猫



▲図5 ウェディング

●下への広がり

「門(gate)をくぐったその先には建物が見える」というのが我々の感覚ではないだろうか。しかしサントリーニでは、崖傍の門をくぐったその先に見えるのは空と海と島。テラスやオーニングは見えたとしても、建物自体は門からは見えないことが多い。まちなみは下に向かって広がっている。(図6)



▲図6 レストランの入り口

町にはヒューマンスケールの路地が続く(図7)。集落が断崖に沿って形成されているので、3次元的で複雑な路地となっている。路地を歩いていると、悪気は無いのだが、いつの間にか、他人の建物の敷地内に入り込んでしまう。また、下のレストランの屋上为上のレストランのテラスとして使われている。どうやら、建物の所有関係や官民境界が日本人の感覚と違ってかなり曖昧な感じ。景観としては、柵や扉に囲まれた場合と比べて、オープンなので見通しが利いている。



▲図7 路地

●10日兄貴

イアは島の北端にある町で、サントリーニの中心であるフィラよりも素朴な感じ。立ち寄った本屋で「Light And Colour Of Santorini(Nikos Rigopoulos著)」というサントリーニの写真集の表紙が一風変わっており目にとまった。写真集自体は、赤・青・黄・緑・白というテーマに沿ってサントリーニの自然や文化が納められている。パラパラとめくるとNikos氏は1971年生まれで私と同じ年。

本屋のスタッフに聞くと、なんとイア市内でギャラリーを経営しているという。そこでギャラリーに伺うと、ご本人が丁度いらっしゃった。しばらく雑談しながら誕生日を訪ねると、なんと私より10日だけ兄貴だと判明。極東の島国とエーゲ海の島とは、Google Earthで計測すると9,278kmの距離。こんなところまで来て、たった10日間しか誕生日が合わない方と偶然出会えるなんて。お陰で大いに意気投合(図8)。



▲図8 Nikos氏のギャラリーにて

●Location-based SNS

Nikos氏との出会いは、彼の写真集を偶然見つけたことから始まっている。この出会い方はこれで物凄く感動したのだが、もし、サントリーニの町に入っただけで、彼の情報や現在地を知ることができたならば、彼ともっと早く出会えたり、より多くの人々が彼と出会えたかもしれない。人と人とをつなぐネットワークサービスとして、SNS(Social Networking Service)の普及があり、私も既に

mixi, Facebook, Twitter, Linkdeln, SPYSEEなどに登録している。SNSは既に多様化・多機能化の一途をたどっており、最近では現在地を共有するLocation-based SNSが出てきている。自動的に現在の位置情報が他人と共有されてしまうことはリスクを伴うが、リアルタイムに互いの現在地を確認できることで、思いがけない出会いや発見が益々増えてくるように思える。個人的な経験でいえば、ある夏の夜、私が下関から加古川へ向かうひかりレールスターと、建設ITジャーナリストが四国から東京へ向かうサンライズ特急とが岡山駅で偶然同じ時刻にすれ違うというサプライズがあった。この場合はGPSやWiFiなどで位置情報を自動的に把握した訳でなく、各々が現在地や状況をTwitterにコマ目につぶやいていて判ったこと。もしSNSをしていなければ、すれ違っても互いの存在は知らずじまい。こんな事もあって、現在地をリアルタイムに共有しながらコミュニケーションするサービスは、特に出先において、個人や組織のエンパワーメントへとつながってくるように感じた。場の力をもっと活用できれば。



最後に一言。また訪れたいサントリーニ、次回は船でアクセスしたい。

3Dデジタルシティ・サントリーニ島 by UC-win/Road 「サントリーニ島」の3Dデジタルシティ・モデリングにチャレンジ

UC-win/Roadによる3次元VR(バーチャル・リアリティ)モデルを作成したものです。

■UC-win/Road WebViewer ダウンロード閲覧 : URL : <http://www.forum8.co.jp/download/ucwin/Road5MB/Roadweb-3.htm>



REPORT

● ”大阪都市模型とVR連携システム ”

お知らせ